
焚き火

天峰繭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焚き火

【Nコード】

N4557D

【作者名】

天峰繭

【あらすじ】

「・・・温かい。」彼女は炎の前でそう呟いた。——淡々とした口調で始まる冬の鬱短編。ほのぼののようで恋愛のようで違うかも。短いので暇つぶしにどうぞ。

「・・・温かい。」

隣にいる少女は手を摩りながらそう呟いた。

目の前には燃え盛る炎。

バチバチと音をたて、黒い煙が空へと向かっている。

「そりゃそうさ、焚き火だもの。」

僕は笑ってそう言った。

「そうね。」

彼女は僕の言葉に少し笑う。

その瞳には炎が映っているが、彼女にはその炎は見えない。わずかに光を感じるくらいだ。

僕は思わず彼女の体を引き寄せた。

「あなたの体も温かいわね。」

「そうかい？」

なにげない会話をうれしく思う。

・・・たといえ――

「なにか変な臭いがするわね。」

顔は正面を向いたまま彼女は小首をかしげる。

「いろいろ燃やしたからね。」

僕はまた笑ってそう言った。

彼女の髪に指を絡めながら目の前の炎を何の感慨もなく見つめる。

・・・そろそろあれも燃え尽きるだろう。

「君は先に部屋に戻るといいよ。僕は後始末するから。」

「わかったわ。・・・早く戻ってきてね。」

彼女はそう言うのと杖をつきながらゆっくりと家の中へと戻っていく。僕はその様子を見守り、目の前の若干勢いが弱まった炎へと目を向けた。

「さすがに灯油をかけて燃やすと違うな。」

燃え損ねて風に遊ばれる布きれを拾う。

そしてそれを炎の中へと入れた。

「それでもさすがに残るか。」

少しではあるが白いものが炎の中に残っている。

だがさすがに形はほとんど残っていない。

「……。」

彼女が燃やしている最中に来たのが誤算だったが、ある程度燃えた後なので誤魔化せたようだ。

「『温かい』……か。」

今ほど彼女の目が不自由だったことに救われる思いをすることはないだろう。

見えていたらと考えるだけで寒気がする。

「……僕は温かくなてないよ。」

そう呟いて天を仰いだ。

青空が涙で滲んで見えない。

ただ嗚咽が零れる。

「……っ。」

——たとえ。

たとえ、君が真実を知ってしまったとしても。

君は焚き火のように僕の事を温かいと言ってくれるだろうか……。

（後書き）

いろいろと謎がある悲しげな鬱の話。

彼女が失明した理由や燃えてるモノの正体など設定はありますがあえて謎のままで。

もっと突っ込んで書いてもよさそうですが、これくらいの謎を残したほうが自分的には好きです。

彼と彼女のその後・みなさんで想像してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4557d/>

焚き火

2011年10月4日18時53分発行